

幼児の内的表象にアクセスする：マッカーサー・ストーリーステム・バッテリー（MSSB）の日本における実施と課題の検討

発達保育実践政策学センター 西 田 季 里

Access the inner world of young children: Use of MacArthur Story Stem Battery in Japan and Examination of Issue

Kiri NISHIDA

MacArthur Story Stem Battery (MSSB) is one of the techniques for assessing the internal representation of young children. This paper aims to examine the issues in implementation and evaluation and the usefulness of MSSB by using it in Japan. Seven story stems extracted from the MSSB were conducted twice for 15 nursery school children at the time of the 4-year-old class(T1) and at the time of the 5-year-old class(T2) according to the implementation manual. With the exception of a story stem, the most of all children surveyed were able to tell narratives that addressed the task. The interpretation of the coding manual was different among the graders, and the points of discussion were described. The internal consistencies of negative/ positive representation score were generally satisfactory, and the results were consistent with previous studies in Western. There was also a positive correlation between children's positive representation scores at MSSB and their observed prosocial behavior, and a negative correlation between children's negative representation scores such as physical aggression at MSSB and their observed prosocial behavior.

目 次

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1 問題と目的 | J 観察された向社会的行動とMSSB各スコアとの
相関 |
| A ボウルビィの内的作業モデルと幼児の内的表象 | 4 考察 |
| B マッカーサー・ストーリーステム・バッテリー
(MSSB) | A MSSBの適切さおよび課題の確認（難易度、ス
トーリーステム） |
| 2 方法 | B 評定マニュアルの適切さ、課題の確認 |
| A 調査の概要 | C MSSBの有用性 |
| B MSSBの評定方法 | D 本研究の限界 |
| C 分析方法 | |
| 3 結果 | 1 問題と目的 |
| A 実施の結果：調査対象児の反応、典型的ナラ
ティブ | A ボウルビィの内的作業モデルと幼児の内的表象 |
| B 実施の結果：ナラティブの一貫性 | J. ボウルビィ (Bowlby, 1969; 1973) ¹⁾²⁾ のアタッチ
メント理論に、内的作業モデル (Internal Working
Model: IWM) という概念がある。内的作業モデルは、
養育される経験を通して構築される、自分を取り囲む
世界、他者、そして自分自身に関する心的表象モデル
を指す (坂上, 2011) ³⁾ 。ボウルビィにおいては、生
後6ヶ月～5歳のアタッチメント経験を基に構成され
る早期の内的作業モデルが、その後の様々な他者との
関係における内的作業モデルの基礎となって生涯続
く、として特に重視されたが、現在では、例えば母親
との関係における内的作業モデル、父親との関係にお |
| C 実施の結果：課題に言及されなかったストー
リーステム | |
| D 評定の結果：評定者間一致度 | |
| E 評定の結果：マニュアルの解釈についての協議 | |
| F 評定の結果：類似する項目間のスコアの一貫性 | |
| G 調査対象児全体の、1回目と2回目のMSSB各
スコアの変化 | |
| H 各調査対象児の、1回目と2回目のMSSBスコ
アの安定性 | |
| I 性差 | |

ける内的作業モデル, ある教師との関係における内的作業モデル, ある友人との関係における内的作業モデル, というように, 個別のモデルが相互独立に形成されるのではないかという論が主流となっている(遠藤, 2016)⁴⁾。いずれにせよ, 同一対象についての内的作業モデルは比較的, 安定的なものであるとされている(Hamilton, 2000)⁵⁾。内的作業モデルは, 社会的コンピテンスや心的健康に関連することも報告されており(Main, 1996; Sroufe, Carlson, Levy, & Egeland, 1999)⁶⁾⁷⁾, 人の発達や健康, およびそれらの支援を考える上でも有用な概念であると考えられるため, これまで, 内的作業モデルを調べるための技法が複数開発され, 発展してきた。

内的作業モデルを調べるための技法は, 対象者の年齢によって異なる。生後6ヶ月から3歳未満の乳幼児は表象機能が未発達とされるため, 内的作業モデルそのものではなく, 内的作業モデルを形成するための基礎となる, 特定養育者へのアタッチメント行動パターンが, ストレンジ・シチュエーション法(Ainsworth et al., 1978)⁸⁾や, アタッチメントQ-ソート法(Waters, & Deane, 1985)⁹⁾によって測定されてきた。一方, 思春期, および成人については, アダルト・アタッチメント・インタビュー(Main, 1996)¹⁰⁾などのナラティブ・アセスメント技法が発展してきた。

そして, 乳児期と思春期の間, 3歳から10歳の子どもの内的作業モデルは, 絵を使ったナラティブや, 未完成のストーリー, 人形, パペットを通じたナラティブを用いて評定する技法が開発されてきた(ex. Attachment Story Completion Task: Bretherton, Prentiss, & Ridgeway, 1990; Attachment Doll-Play Interview: Oppenheim, 1997; Manchester Child Attachment Story Task: Green, Stanley, Smith, & Goldwyn, 2000; レビューとして西田, 2018)¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾。これらの技法で絵や人形を用いるのは, 一つには, 言語能力がまだ十分に発達していない子どものナラティブを, 絵や人形が補助することができると考えられたためであり, 二つには, 絵や人形遊びの中のストーリーとすることで, ストーリーで描かれる, 親との分離や葛藤などのシビアなテーマから距離を置いて, 子どもが過度なストレスを受けることなく語ることができる, と考えられているためである。一方で, 絵や人形遊びの中のストーリーとすることによって, 語られるナラティブは, 純粋な内的作業モデルそれ自体というよりも, より広い, 子どもの内的表象として多面的に捉えられる, という考えもある。BuchsbaumとEmde (Buchsbaum, & Emde, 1990)¹⁵⁾

は未完成のストーリー(ストーリーシステム)を利用して, 子どもたちによる親の表現, 共感, 向社会的行動, 規則の順守, 家族関係など, 多面的なテーマに渡り, 豊かな個人差が見られることを示した。そして, このEmdeと, Attachment Story Completion Task (ASCT)の主な開発者であるBrethertonとの非公式な協議とコラボレーションの後, Bretherton, Emde, Buchsbaum, Wolf, Fischer, Oppenheim, Ridgeway, Robinson, Rubin, Wamboldt, Watson, Zahn-Waxlerらを含むマッカーサー・ナラティブ・ワーキンググループが組織され, このグループの活動の中で, 子どもの内的表象に多面的にアプローチする技法, マッカーサー・ストーリーシステム・バッテリーが開発されたのである(Holmberg, Robinson, Corbitt-Price, & Wiener, 2007)¹⁶⁾。

B マッカーサー・ストーリーシステム・バッテリー(MSSB)

マッカーサー・ストーリーシステム・バッテリー(MacArthur Story Stem Battery. 以下, MSSB; Emde, Wolf, & Oppenheim, 2003)¹⁷⁾の対象年齢は3歳から, 上限は特にないが, 多くは7歳くらいまで用いられる。13の未完成のストーリー(ストーリーシステム)と, 人形や小道具を併用し, 子どもに物語の続きを演じてもらい, 子どもが語るストーリーの内容(共感, 愛情, 攻撃, 罪悪感, 親の表象など)やパフォーマンス(ナラティブの一貫性, 子どもの情動表出など)について評定し, 情動的, 社会的, 道徳的, 言語的発達をみる。各ストーリーが扱う大テーマはアタッチメントだけでなく, 道徳, 達成, エディプス・コンプレックスなど, 比較的幅広い要素を含んでいる。MSSBは, 実施マニュアルが出版されており(Bretherton & Oppenheim, 2003)¹⁸⁾, 実施に研修の受講や免許が必須とはされていない。また, 個々の研究の目的や都合に応じ, ストーリーの数を絞り込んだり, 逆に他のアセスメント技法からストーリーを追加したり, あるいは評定のしかたを変えたり, といったカスタマイズを許容しているため, 比較的手軽に実施でき, 欧米では数多くの研究で使用されている。

MSSBと親や教師による評定に基づく子どもの行動傾向との関連を調べた研究は, 臨床群, 非臨床群両方において数多くあり, 比較的一貫した結果が得られている。例えば, Stadelmannら(Stadelmann, Perren, von Wyl, & von Klitzing, 2007)¹⁹⁾は, 5歳児(N=153)を対象にMSSBを実施し, その親と教師には子どもの5歳時点と6歳時点の2時点でStrengths and Difficulties

Questionnaire（以下、SDQ; Goodman, 1997）²⁰⁾を用いて子どもの向社会的行動や問題行動などを評定してもらい、両者の関連をみた。その結果、MSSBにおけるネガティブな親の表象は、5歳から6歳にかけてのSDQにおける問題行動の増加を予測し、MSSBにおけるポジティブな親の表象は5歳から6歳にかけてのSDQにおける向社会的行動の増加を予測した、という結果が得られたと報告している。また、von Klitzingら（von Klitzing, Stadelmann, & Perren, 2007）²¹⁾は、MSSBにおけるネガティブで攻撃的なテーマが、親が報告した行動の問題や多動性と関連することを報告している。臨床群については、例えば、MatinKhahら（MatinKhah, Amiri, Mazaheri, & Ghanbari, 2020）²²⁾は、4～7歳の外在化障害のある子ども（N=24）とない子ども（N=20）の2つのグループに分けMSSBスコアの違いをみたところ、外在化障害のある子どもは外在化障害がない子どもに対し、ネガティブな表象が有意に高く、ポジティブな表象と物語の一貫性が有意に低かったと報告している。

MSSBと内在化問題との関連に関する研究結果はそれほど一貫していない（Stadlmann, Otto, Andreas, von Klitzing, & Klein, 2015）²³⁾が、MSSBから把握できる子どもの内的表象が、子どもの経験と内在化問題との間の根底にある緩和メカニズムとして機能することを示唆する報告も複数なされている。例えば、MSSBにおける物語の一貫性が、家族の危険因子（例えば、母親のストレス）と子どもの内在化問題との間の正の関連を緩衝する効果があるという報告がある（Müller, Perren, & Wustmann Seiler, 2014; Stadelmann et al. 2015）^{24) 25)}。

また、MSSBにおけるテーマや物語の一貫性は、実行機能や言語能力と関連することも指摘されている。Dealyら（Dealy, Mudrick, & Robinson, 2019）²⁶⁾は、210人の子どもの4歳時点と6歳時点で実行機能と言語能力の測定を行い、6歳時点ではMSSBも実施し、それらの関連をみた。その結果、6歳時点のMSSBにおける、向社会的で一貫性のあるナラティブは、4歳時点の実行機能と言語能力の両方によって予測されたという結果を得た。

MSSBはまた、不適切な養育を反映する可能性も示唆されている。Beldenら（Belden, Sullivan, & Luby, 2007）²⁷⁾は、MSSBで語られるネガティブな母親の表象と、観察された母親の子どもに対するネガティブな行動が関連することを指摘した。Macfieら（Macfie, Toth, Rogosch, Robinson, Emde, & Cicchetti, 1999）²⁸⁾は、虐待を受けた群は、そうでない群に比べ、MSSBにお

ける親による共感や援助の表現が少ないと報告した。Langevinら（Langevin, Cossette, & Hébert, 2020）²⁹⁾は、性的虐待を受けた群がそうでない群に対し、MSSBにおける共感、援助のテーマが有意に少なく、一貫性の無い物語を語る傾向があると報告した。

こうした、MSSBと他の変数との関連は、子どもの年齢や性別によっても差がみられることも指摘されている。例えば、Warrenら（Warren, Oppenheim, & Emde, 1996）³⁰⁾は、3歳児のMSSBにおける攻撃的なテーマの多さと問題行動との間に有意な関連は見られなかったが、5歳児では相関がみられ、また、物語の一貫性は、3歳よりも4歳と5歳の方が高いと報告している。また、男児より女児の方が、物語の一貫性が高く（Oppenheim, Nir, Warren, & Emde, 1997; von Klitzing, Kelsay, Emde, Robinson, & Schmitz, 2000）^{31) 32)}、より向社会的で思いやりのあるテーマが含まれる傾向があり（Zahn-Waxler, Park, Essex, Slattery, & Cole, 2005）³³⁾、一方の男児は対立に基づく物語の中でより攻撃的なテーマを語る傾向があると報告されている（Oppenheim et al, 1997; von Klitzing et al, 2000; Woolgar, Steele, Yabsley, & Fonagy, 2001）^{34) 35) 36)}。また、母親の抑うつ症状の子どもの内在化問題への影響をMSSBのポジティブな表象が緩衝する効果は、特に女児においてみられる、という報告もある（Andreas, Otto, Stadelmann, Schlesier-Michel, von Klitzing, & Klein, 2017）³⁷⁾。

一方で、MSSBのストーリーおよびコーディングシステムはアメリカの中流階層サンプルに基づいているので、アセスメントで得られた変数間の関連は、文化や民族的背景によって異なることも指摘されている（Grey & Yates, 2014）³⁸⁾。他の社会でのMSSB実施においては、個々の文化に合わせた改変—たとえば、イスラエル（Eshel, Landau, Shlayer, & Ben-Aaron, 1997）³⁹⁾、韓国（Lee, Jung, & Shin, 2003; Lee & Lee, 2013）^{40) 41)}—がなされてきた。日本でも、利用に適した日本版の開発が待たれるところであり、そのための実施例などの知見の積み上げが必要だと考えられる。しかし、現在のところ、国内でのMSSBの実施例や報告はほとんどない。唯一、CiNiiで見つかる先行研究に澤田らの紀要論文（澤田・渋谷・中植, 2014; 2015）^{42) 43)}があるが、ナラティブの質的な分析にとどまっており、評定マニュアルを使ったものではない。そこで、本研究では、国内の保育園でMSSBを実施マニュアルに従って実施し、評定マニュアル（Robinson, Mantz-Simmons, Macfie, 2009）⁴⁴⁾に従って評定を行い、実施や評定における課題を検討する。また、海外の先行研

究においてはこれまでMSSBと子どもの行動傾向（親または教師評定）など、外から見える変数との関連について一貫した結果が得られてきたことを踏まえ、MSSBの各評定スコアと、自然場面観察によって得られた向社会的行動の数や成功率との関連を確認し、日本の研究におけるMSSBの有用性を検討する。

2 方法

A 調査の概要

1 調査対象

調査対象は、横浜市内の認可保育園の園児15名（女児10名、男児5名）であった。MSSBは調査対象児の4歳児クラス時点と、5歳児クラス時点の2回実施し、それぞれの実施時の平均月齢は1回目57か月、2回目63か月であった。

2 調査期間

調査時期は1回目実施が2015年10月、2回目実施が2016年4月であった。

3 倫理的配慮

本研究は東京大学の倫理審査を受け、教育学研究科長の承認を得て行われた（審査番号21-20）。また、調査協力園の施設長および、調査対象児の保護者から同意書を得て行われた。さらに実験の際には、口頭で調査対象児から同意を得て実験を行った。

4 調査の内容

MSSBの実施

本研究では、MSSB全13のストーリーシステムのうち、家族とのアタッチメントにフォーカスした7つのストーリーシステム（こぼれたジュース、いなくなった飼い犬、飼い犬との再会、熱いソース、両親の旅行、両親との再会、岩登り）を抜粋し、ウォーム・アップとしての“誕生日”のストーリーと、クールダウンとして最後の“家族の楽しみ”のストーリーを加えた計9つのストーリーシステムを実施した。用いるストーリーシステムを上記9つに絞り込んだのは、調査対象児や園への負担を考慮し、実施にかかる時間を各児一回約30分程度に収めるためであった。絞り込みにあたっては、もともとの内的作業モデルの測定対象であるアタッチメントをテーマとしたストーリーシステムを優先して絞り込んだ。また、実施にあたっては、実施マニュアルを日本語訳した台本を作成し、登場人物の名前を日本名に変更した（Table 1）。

実施は、保育室の隅に衝立を設けたスペースで、観察対象児1人ずつ、調査者と1対1で行い、その様子

をビデオ撮影した。実施中の調査者の声かけは、実施マニュアルに従った。

観察された向社会的行動

撮影者1名もしくは2名（日によって異なる）がそれぞれハンディビデオカメラを用いて、園での自然場面において、対象児1名につき1回20分ずつ、18～20回、個別にビデオ撮影した（タイムサンプリング）。撮影の順番は、各回ランダムに順番を決めて行い、調査対象児15名で、294動画を撮影した。マイクの操作ミスにより音声が記録されていない動画が7動画あり除外したため、287動画となった。調査期間の終盤に欠席が続いた調査対象児は、他の調査対象児より撮影回数が少なくなった。撮影回数を調査対象児間で統一するため、各児18回の撮影回数となるように、ランダムに撮影ファイルを除外し、270動画を分析に用いることとした。

本研究では観察のために、向社会的行動を以下のようにより操作的に定義した。すなわち、「児が他児あるいは他児が含まれる集団・状況に何らかのニーズを見出し、そのニーズを満たそうとして行う自発的な行動」⁴⁵⁾と定義した。「何らかのニーズを見出し」としたのは、向社会的行動の客体となる園児のニーズが観察者からは必ずしも明らかではないこともあるからである（ex. おもちゃの分与、情報提供）⁴⁶⁾。そして、20分ごとのビデオデータについて、向社会的行動数とその成功／不成功を観察した。成功／不成功については、若林（2003）⁴⁷⁾を参照し“成功”を以下のように操作的に定義した；すなわち、当該向社会的行動が、受け手に受け入れられた場合、あるいは第三者にポジティブに受容されるなど、状況にポジティブな進展をもたらすこと、という定義である。もし、当該向社会的行動が、受け手に拒否／反発された場合、あるいは、行動が不十分で受け手に不満が残る場合、あるいは誰にも気付かれず、状況に何の進展も見られない場合、“不成功”とした。ここで“成功”とカッコ付きで記述するのは、ここでの“成功”が個々の向社会的行動エピソードにおける行動客体あるいはその場に居合わせた第三者の反応や状況の変化を観察して判断される限りの成功であり、より継続的な文脈を踏まえた場合の成功を考慮することができないからである。

観察の信頼性

第一観察者が分析対象の270動画を観察し上記の項目についてコーディングした。第一観察者の観察精度を調べるため、そのうちの2割強にあたる、観察のべ54回分計約18時間の動画を第二観察者が観察し、向社

Table 1. 使用したMSSBのストーリーシステム（アタッチメントにフォーカスした7つのストーリーシステムとウォームアップ、クールダウン）

タイトル	調査者プロンプト（調査者としてのセリフはI、登場人物としてのセリフは登場人物名をセリフの前に示す。主人公ときょうだいは調査対象児と同性とした。本表では、男児の例を示す。〔カッコ〕内の記述は調査者の行動についての指示）	用意する人形と小道具
ウォームアップ：誕生日	I「誰がいるか見ていてね。これは家族です。これがおばあちゃん。これがお母さん。これがお父さん。これがお兄ちゃん、名前はダイスケ。これが弟で、名前はマコト。これが飼っている犬で、名前はポチ。誰がいたかな？（調査対象児に答えさせ、必要ならば助ける）今日はダイスケのお誕生日です。お母さんがきれいなケーキをつくってくれました。さあ、お誕生会を始めますよ。」母「おばあちゃん、お父さん、ダイスケ、マコト。ダイスケのお誕生日をお祝いしましょう。」I「家族をテーブルにつかせてくれる？（調査対象児に人形を配置させ、必要ならば助ける）さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて。」	犬も含めた家族全員（友人や家族以外の人物は含まない）、テーブル、イス、誕生日ケーキ
こぼれたジュース	I「家族のみんなはのどが渇いたのでジュースを飲もうとしています。さあ、ジュースが飲めるように、家族のみんなをテーブルにつかせてください。（人形が配置されるまで待つ）家族のみんなはジュースを飲んでいます。ダイスケが立ち上がって、テーブルの向こう側へ手を伸ばします。そして…あっ！ダイスケは自分のジュースをこぼしてしまいました。（主人公がピッチャーを床にこぼす様子を調査対象児に見せる）さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて。」	父、母、主人公、きょうだい、テーブル、イス、ジュースを入れるピッチャー
いなくなった飼い犬	I「ダイスケは、朝起きてからずっと、大好きな犬のポチと遊ぶことを考えていました。」ダイスケ「お母さん、ぼく、お庭に行ってポチと遊ぶね。」母「いいわよダイスケ。」I「ダイスケは庭に出ました。」ダイスケ「あれ？！ポチがいなくなっちゃった！（心配そうな声）」I「さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて。」	母、主人公
飼い犬との再会	I「〔ポチを戻し、調査対象児から離れたテーブルの端に置く〕見て！誰が戻ってきたかな。さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて（やや興奮したトーンで）。」	母、主人公、犬
熱いソース	I「お母さんとダイスケがコンロの前にいます。お父さんとマコトはテーブルのイスに座っています。」母「今日のごはんはおいしいわよ。でもまだできてないの。コンロに近づきすぎないようにね。」ダイスケ「わあ、おいしそう。もう待てない。ちょっと味見したいなあ。（主人公が鍋にぶつかる様子を調査対象児に見せる）あ！手をやけどしちゃった！痛い！」I「さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて。」	父、母、主人公、きょうだい、テーブル、イス、コンロ、鍋もしくはフライパン
両親の旅行	I「ダイスケとマコトは外へ遊びに行きます。お母さんとお父さんは旅行に行こうとしています。車は家の前に止まっています（車を出す）。」母「さあ、子どもたち、お父さんとわたしは、これから旅行に行ってきます。明日また会いましょう。おばあちゃんが一緒にお留守番してくれるわよ（祖母を出す）。」I「さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて。」I「そして彼らは出発しました。（車をテーブルの下に移動させる）さあ、お母さんとお父さんが行ってしまっ、子どもたちは何をやるかな？」	父、母、主人公、きょうだい、祖母、車
両親との再会	I「〔両親を乗せた車をテーブルの下から戻し、主人公ときょうだいから離れた場所に置く〕次の日、おばあちゃんが窓の外を見て言いました。』祖母「見て、あなたたち。お母さんとお父さんが旅行から戻って来たみたいだわ。あれはお母さんとお父さんの車じゃないかしら。」I「さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて。」	父、母、主人公、きょうだい、祖母、車
岩登り	I「今日は家族で公園に行きます。（家族を公園に近づける。たとえば、緑のフェルトの端に人形を乗せ、主人公を岩のところまで歩かせる）」ダイスケ「ねえ見て！高い岩だ！ぼく、一番上まで登ってみる。」母「ええ、本当に？よくよく注意してね！（警告するような声で）」I「さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて。」	父、母、主人公、きょうだい、緑のフェルト、スポンジで作った岩
クールダウン：家族の楽しみ	I「家族のみんなはおうちにいます。」母「（幸せそうに父に）今日はお休みよ！みんなで一緒に何かしましょう。」父「ああ、何かみんなが楽しめることをしよう。」母／父「（主人公ときょうだいの方を向いて）子どもたち、今日は何をしたい？」I「さあ、この続きはどうなるかな？お人形を使って、お話してやってみせて。」	父、母、主人公、きょうだい、祖母、犬、調査対象児が使いたい小道具を自由に使える

会的行動の生起と成功／不成功について、第一観察者のコーディングの正否を判定した。その結果、行動の生起については約98%、成功率判断については約97%（いずれも小数点以下四捨五入）の「正」判断率となった。そのため、第一観察者の観察精度は信頼に足ると判断した。

B MSSBの評定方法

1人の研究者と、1人の大学院生が撮影したビデオを観察し、Robinsonら（Robinson et al., 2009）⁴⁸⁾のテネシー版コーディングマニュアルに基づき、合計210のストーリーナラティブ（15名×7ストーリー×2回実施）それぞれについて、以下のように評定した。①ストーリーの内容として、テーマ（全37項目）、登場人物（父・母・祖母・子ども）についての表象（父・母・祖母は各5項目、子どもは4項目で計19項目）、臨床群用項目（12項目）を、「あり」1点もしくは「なし」0点で評定し、また、②母子および父子関係性の期待を、評点3をニュートラルとした1～5点の5段階で評定し、③パフォーマンス(1)として不安行動とコントロール行動を「あり」1点もしくは「なし」0点で評定し、④パフォーマンス(2)として物語の一貫性を0～10点の11段階で評定した。

C 分析方法

MSSBで得られた調査対象児のナラティブやパフォーマンスから典型例を記述し、MSSBの課題が調査対象児にとって適切であるかどうか検討した。次に、2人の評定者間の評定の一致率および κ 係数を算出し、評定がずれやすい項目や協議した点を確認した。

次に、2人の評定者が協議して決定した最終スコアについて、項目ごとにスコアの範囲（最小値、最大値）とSDを集計し、Table 2・3・4に示した。また、これらの最終スコアについて、以下の分析を行った。

まず、MSSBの項目間の類似性から評定マニュアルの信頼性を確認するため、1回目と2回目を合計したMSSB各項目スコアについて、ポジティブな項目、ネガティブな項目間のクロンバック α 係数を算出し検討した。

次に、調査対象児全体で1回目と2回目の各MSSBスコアで差がみられたかを調べるため、対応サンプルによるWilcoxon順位検定を行った。次に、1回目と2回目のMSSBにおいて、各児のスコアの順位が安定的であったのかどうかを調べるため、各児の1回目MSSBスコアと2回目MSSBスコアのSpearman順位相

関をみた。なお、1回目と2回目いずれも調査対象児の大多数（調査対象児全体の75%以上、すなわち12名以上）のスコアが0であった項目については、外れ値の分析となってしまうため、相関分析の対象から除外した。次に、性差がみられたかを調べるため、1回目、2回目、1回目と2回目の合計、それぞれの各MSSBスコアについて、独立サンプルによるMann-WhitneyのU検定を行った。

また、観察で得られた変数（向社会的行動数、成功率）と、MSSBで得られた内的表象についての各評定スコアとの相関をみるため、MSSBの各ストーリーシステムについての評定スコア×7つのストーリー×2回実施の総計スコアを算出し、観察変数（前後半18回合計）とのSpearman順位相関分析を行った。

分析は全てSPSS ver.25を用い、有意水準は.05とした。

3 結果

A 実施の結果：調査対象児の反応、典型的ナラティブ

調査対象児達は各回とも、概ね調査者の促しに応じ、ストーリーシステムの続きのストーリーを語った。1回目実施時に1名の調査対象児のみ、ナラティブがほとんど出ず、母親人形と子ども人形を手に持ち、両者をハグさせたり並んで歩かせたりしてストーリーを終えることがほとんどであったが、2回目実施時には他の調査対象児たちと同様に、ストーリー作りに取り組めた。

ウォーム・アップとクールダウンを含めた9つのストーリーシステム全てを語るのにかかった時間は各児25分～45分であった。それぞれのストーリーシステムにおいて語られた最もシンプルかつ典型的なナラティブを以下に示す。

- ①こぼれたジュース：児「床を拭いた。」調査者「誰が拭いたの？」児「お母さん。」調査者「それで、どうなったかな？」児「お父さんが新しいジュースを注いでくれて、みんなでジュースを飲んだ。おしまい。」
- ②いなくなった飼い犬：児「(犬を)探した。」調査者「誰が犬を探したの？」児「○○（主人公の名前）とお母さん。」調査者「それで、どうなりましたか？」児「みつけた。」調査者「誰が見つけたの？」児「○○（主人公の名前）。」
- ③飼い犬との再会：児「(人形を動かして)『ポチ、どこ行ってたの?』」調査者「『ポチ、どこ行ってたの?』って、誰が言いましたか?」児「○○（主人公

Table 2. MSSB物語のテーマと臨床群用項目 最終スコア「あり」1点, 「なし」0点で評定, 7つのストーリーの合計, 0～7点の最小値, 最大値, SD (全員のスコアが1回目・2回目ともに0であったものを除外) (N=15)

テーマ	1回目MSSB			2回目MSSB		
	最小値	最大値	SD	最小値	最大値	SD
誇り (達成)	0	2	0.60	0	1	0.40
身体攻撃	0	5	1.67	0	4	1.14
コンプライアンス	0	2	0.57	0	2	0.70
非コンプライアンス	0	1	0.4	0	3	1.09
親からの共感・援助	0	5	1.20	0	6	1.91
きょうだいからの共感・援助	0	2	0.61	0	2	0.60
調査対象児からの共感・援助	0	1	0.57	0	0	0.00
祖母からの共感・援助	0	6	1.51	0	1	0.47
アフィリエーション (一体感)	0	6	1.51	0	7	1.71
葛藤のエスカレーション	0	0	0	0	1	0.25
アフェクション (温かい情緒的交流)	0	6	1.70	0	6	1.84
他者からの非難	0	1	0.25	0	1	0.47
分与	0	1	0.25	0	0	0.00
レバレーション (秩序の回復)	1	4	0.8	1	4	0.81
罪 (罪悪感)	0	1	0.34	0	2	0.72
個人的傷 (痛みへの言及)	0	2	0.60	0	3	0.81
ニュートラルな非典型的応答	0	2	0.72	0	5	1.41
ネガティブな非典型的応答	0	4	1.14	0	2	0.80
非身体的な罰・しつけ	0	1	0.25	0	1	0.44
身体的な罰・しつけ	0	1	0.25	0	1	0.34
臨床群用項目						
侵入的トラウマ	0	0	0.00	0	1	0.25
調査対象児とストーリーの同化/ 境界の混乱	0	1	0.40	0	1	0.25
ファンタジー傾向性	0	1	0.25	0	2	0.50
子どもの親役割	0	1	0.34	0	0	0.00
子どもの過大な力	0	3	0.96	0	2	0.54
モノの破壊	0	3	0.77	0	1	0.34
解決する落胆・喪失	0	1	0.40	0	1	0.25
解決しない落胆・喪失	0	1	0.25	0	1	0.25

Table 3. MSSB人物の表象 最終スコア「あり」1点, 「なし」0点で評定, 7つのストーリーの合計, 0～7点の最小値, 最大値, SD (N=15)

		1回目MSSB			2回目MSSB		
		最小値	最大値	SD	最小値	最大値	SD
母親	ポジティブな表象	0	6	1.75	1	7	1.91
	ネガティブな表象	0	1	0.34	0	1	0.25
	しつけ的表象	0	1	0.34	0	2	0.60
	コントロール表象	0	1	0.25	0	1	0.25
	不調和な表象	0	0	0.00	0	0	0.00
父親	ポジティブな表象	0	4	1.20	0	3	0.93
	ネガティブな表象	0	1	0.25	0	1	0.25
	しつけ的表象	0	1	0.25	0	2	0.57
	コントロール表象	0	0	0.00	0	0	0.00
	不調和な表象	0	0	0.00	0	0	0.00
祖母	ポジティブな表象	0	2	0.75	0	2	0.60
	ネガティブな表象	0	0	0.00	0	0	0.00
	しつけ的表象	0	0	0.00	0	1	0.25
	コントロール表象	0	0	0.00	0	0	0.00
	不調和な表象	0	0	0.00	0	0	0.00
子ども	ポジティブな表象	0	4	1.45	0	5	1.63
	ネガティブな表象	0	5	1.38	0	3	1.07
	嘘の表象	0	0	0.00	0	0	0.00
	不調和な表象	0	1	0.25	0	0	0.00

Table 4. MSSB関係性の期待, パフォーマンス 最終スコアの最小値, 最大値, SD (N=15)

関係性の期待	1回目MSSB			2回目MSSB		
	最小値	最大値	SD	最小値	最大値	SD
母子関係性の期待	15	33	5.14	16	33	4.11
父子関係性の期待	17	29	2.87	17	25	1.89
パフォーマンス						
コントロール行動	0	6	1.89	0	4	1.36
不安行動	0	7	1.84	0	5	1.36
物語の一貫性	6	66	14.94	46	70	6.00

の名前)。」調査者「〇〇が言ったのね。それで、どうなったかな？」児「〇〇(主人公の名前)はポチと遊んだ。おしまい。」

④熱いソース：児「(やけどしたところを)冷やした。」調査者「誰が冷やしたかな?〇〇(主人公の名前)が自分で冷やしたのかな?それとも誰かが冷やしてくれたのかな?」児「お母さん。」調査者「お母さんが冷やしてくれたの。それで、どうなりましたか?」児「治って、皆でテーブルに座ってごはんを食べた。おしまい。」

⑤両親の旅行：児「(人形を持って)『行ってらっしゃーい』。」調査者「『行ってらっしゃーい』は誰が言いましたか?」児「〇〇(主人公の名前)と△△(きょうだいの名前)とおばあちゃん。」調査者「それで、どうしたかな?」児「〇〇と△△で遊んで、おばあちゃんがご飯作ってくれて、みんなでご飯食べて、寝て、次の日になった。」

⑥両親との再会：児「お母さんとお父さんが帰ってきたから、嬉しんだ。」調査者「嬉しんだ?嬉しかったの。誰が嬉しかったのかな?」児「〇〇(主人公の名前)と△△(きょうだいの名前)。それで、みんなで遊んで、ご飯食べて、寝た。おしまい。」

⑦岩登り：児「〇〇(主人公の名前)が岩に上って、落ちた。」調査者「落ちたの。落ちて、どうなったかな?」児「ケガした。」調査者「ケガしたの。ケガして、それからどうなったかな?誰か、なにかしたかな?」児「お母さんが絆創膏貼ってくれて、治った。それで、みんなで家に帰った。おしまい。」

以上のナラティブ例は、最もシンプルに語られたストーリーの例である。これらの例に加え、登場人物の追加のセリフとして、例えば、「大丈夫?」「気をつけてね。」「ありがとう。」「一緒に探そう。」「はい、お母さん。」「もう!ダメじゃない。」「こらー!」などがみられた。また、ナラティブとして、唐突な身体攻撃(ex. 母親を蹴る)や突飛なストーリー展開(ex. ジュースをこぼして家を追い出されたので南極に行って鯨に

乗って冒険に出た、犬と遊んで戻ってきたら家になくなってしまった)などがみられた。さらに、人形の動きとして、床を拭く、ケガの手当て、ハグ、握手、手をつなぐ、蹴る、投げ飛ばす、遊ぶ、などがみられた。

B 実施の結果：ナラティブの一貫性

分析対象の7つのストーリーシステムにおける、調査対象児たちのナラティブの一貫性スコアの合計(0~10点の11段階評定×7ストーリーで、70点満点)は、1回目6~66点(平均=44.93, SD=14.94)、2回目46~70点(平均=52.67, SD=6.00)となった。平均スコアは2回目で上昇していたが、Wilcoxonの順位検定では有意な差にはならなかった(p=.06)。より大きいサンプルでの調査が必要だと考えられる。

評定マニュアルに従い、ストーリーシステムの課題を捻じ曲げることなくストーリーを語った場合、最もシンプルなナラティブ(ex. ジュースをこぼすストーリーシステムに対し、「床を拭いた。お母さんが」)で6点をつけた。すなわち、7つのストーリーの合計が42点以上であれば、概ね全てのストーリーの課題を理解し解決するストーリーを語っていたと考えられる。第1回ではほとんどナラティブを語る事ができない調査対象児が1名おり、その他に、物語の一貫性合計スコアが42点未満の調査対象児が5名いたが、第2回の物語の一貫性合計スコアが最も小さい調査対象児も46点となっており、どの調査対象児もある程度ストーリーシステムを理解し、解決するストーリーを語っていたと考えられる。よって、5歳児クラス時点(5歳または6歳)では、MSSBのストーリー作りは困難なく実施できたと考えられる。また、一貫したストーリーを語る事ができない場合も、人形の動きを見ることで評定をすることができた。

C 実施の結果：課題に言及されなかったストーリーシステム

一方、今回の調査で、ストーリーが想定する課題が

言及されにくいストーリーステムがあったことも分かった。それは「両親の旅」ストーリーであり、ストーリーステムが想定する課題（両親との分離）を課題として言及しない調査対象児が1回目、2回目とも、15名中14名いた。「両親の旅」ストーリーは、父親と母親が二人で一泊旅行に出かけると言い出し、子ども（兄弟もしくは姉妹）は祖母と留守番するよう言われる、というストーリーステムである。このストーリーステムでは、両親との分離不安が課題として想定されており、調査対象児が分離不安の解決をどのように語るのかを評定する。しかし、15名中14名の調査対象児が、何のためらいもなく両親を旅行に出かけるための車に乗せ、両親が旅行に行ってしまうと、「きょうだいで遊んで、おばあちゃんがお飯を作ってくれて、食べて、寝た」のように、不安や葛藤は一切言及しないままいつの間にか解決しているストーリーを語った。両親との分離と関連する内的表象はこのストーリーによって喚起されなかった可能性が考えられる。

D 評定の結果：評定者間一致度

評定マニュアルの適切さと課題を確認するために、2人の評定者間の一致率をみた。

ストーリーのテーマについて、分析対象である210のストーリーナラティブ（15名×7ストーリー×2回実施）のうち、1回も出てこなかったと2人の評定者で一致した物語のテーマが17項目、家族の表象が7項目、臨床群用項目が1項目あった。それらのテーマとは、競合、言語的攻撃、友人／登場人物以外の人物／人物以外からの共感・援助、恥（主人公／他者／調査対象児自身）、主人公／調査対象児自身からの非難、告げ口、不正直、言語的コンフリクト、セクシャルなテーマ（私的／性的）、嘲笑、疲労であった。また、1回も出てこなかった家族の表象とは、母親の不調な表象、父親のコントロール表象、父親の不調な表象、祖母のネガティブ表象、祖母のコントロール表象、祖母の不調な表象、子どもの嘘の表象であった。そして、1回も出てこなかった臨床群用項目とは、現実と空想の境界の混乱であった。これらのテーマのいくつかは、抜粋したストーリー（13のストーリーステム中の7つ）ではない、他6つのストーリーの中で出てくることが想定されているテーマであった（ex. 友人が登場人物として出てくるストーリーステムなど）。

上記の1回も出てこなかった25項目のうち、物語のテーマ17項目と臨床群用項目1項目の計18項目を除

外した、ストーリーのテーマ20項目（達成、身体攻撃、従順、非従順、親／きょうだい／祖母／調査対象児自身からの共感・援助、アフィリエーション、葛藤のエスカレーション、アフエクション、他者からの非難、分与、レパレーション、罪悪感、傷や痛み、ニュートラルな非典型的応答、ネガティブな非典型的応答、非身体的な罰、身体的な罰）と、母親／父親／祖母／子どもの表象12項目（母親はポジティブ／ネガティブ／しつけ／コントロール、父親はポジティブ／ネガティブ／しつけ、祖母はポジティブ／しつけ、子どもはポジティブ／ネガティブ／不調和）、臨床群用の評定8項目（侵入的トラウマ、調査対象児とストーリーとの境界の混乱、ファンタジー傾向性、子どもの親役割、子どもの過大な力、モノの破壊、解決する落胆と喪失、解決しない落胆と喪失）、パフォーマンス2項目（不安行動、コントロール行動）についての2人の評定者間の一致率をみた。その結果、一致率は92%、 κ 係数は0.55であった。ほとんどの項目が“なし”であったため、見た目の一致率と κ 係数が大きく異なった。 κ 係数が0.61未満であったため、2人の評定者で評定マニュアルの解釈を協議した（後述）。協議をした後、再び2人の評定者が別々に評定を行った。その結果、一致率は98%、 κ 係数は0.88となり、十分な一致率が得られた。残りの一致しなかった箇所は再協議し、最終スコアを決定した。

母子関係および父子関係の期待項目については、評点3をニュートラルとした1～5の5段階評定で、完全一致が68%、 ± 1 が28%、 ± 2 が4%であり、評定マニュアルの解釈は概ね一致していたと考えられる。一致しなかった箇所は協議し、最終スコアを決定した。

物語の一貫性については、0～10の11段階評定で、完全一致が40%、 ± 1 が26%、 ± 2 が31%、 ± 3 が3%であり、評定マニュアルの解釈が概ね一致していたと考えられる。一致しなかった箇所は協議し、最終スコアを決定した（なお、百分率は全て小数点以下、四捨五入）。

E 評定の結果：マニュアルの解釈についての協議

1回目の評定では、ストーリーの内容（テーマ、登場人物の表象、臨床群用項目など）について、 κ 係数が0.61未満となったため、2人の評定者（評定者A、評定者B）が協議をした。以下、一回目の評定で評定者Aと評定者Bとで解釈が一致せず、協議をした箇所を記す。

・登場人物としての“子ども”と調査対象児としての

“コドモ”の区別：評定者Bは評定マニュアルにある登場人物としての“子ども (child)”と、調査対象児としての“コドモ (CHILD)”の記述を混同していたため、確認して区別を明確にした。

・人形の動きの考慮：評定者Bは発話によってのみ評定していたが、協議の結果、人形の動きによる表現（人物同士のハグや手をつないで行動すること）を考慮することとした。

・テーマ「コンプライアンス」の評定基準：評定者Aは親からの指示に子どもが従った場合に、“あり”とし、評定者Bは子どもが社会的に望ましい行動をとった場合に“あり”としていた。評定マニュアルの例示は全て大人の要望に子どもが明確に合わせている場合であったため、協議の結果、大人からの要望に明確に従った場合に“あり”とした。

・テーマ「共感・援助」の評定基準：評定者Bは親や祖母が食事を作るというナラティブに対し、共感・援助を“あり”としていたが、協議の結果、食事を作るのみで子どもの葛藤や困り事に対する共感・援助がない場合は、共感・援助に含めないとした。ただし、食事を作ることは、その人物のポジティブな表象として考慮することとした。

・テーマ「非典型的な応答（ニュートラル）」の評定基準：評定者Bは、例えば、家族で公園に行くストーリー（子どもが岩に登ろうとして危険だと親に注意を促されるストーリーシステム）で、妹が一人で公園の外に走っていき、父親に「危ないからダメだよ」と止められると、ストーリーを逸脱したとして非典型的な応答（ニュートラル）を“あり”としていた。しかし、非典型的な応答（ニュートラル）についての評定マニュアルの説明では、ストーリーの典型例から外れているというよりも、日常的にめったに起こらない突飛なテーマ（ex. 父親が突然、カップに頭を突っ込む）として記述されていたことから、協議の結果、ストーリーシステムが期待する文脈から外れていても、その状況で日常的に起こりそうなこと（同様の状況で調査対象児が経験しうと思われること）は非典型的な応答に含めないこととした。上記の例では、家族で公園に遊びに来たときに、幼い子どもが公園の外に走って行ってしまい親が制止するという状況は、調査対象児が日常的に経験しうることとし、非典型的な応答に含めないとした。

・親が子どもを危険から保護することを、ポジティブ表象とするか、しつけの表象とするか：ストーリー「熱いソース」で、主人公が料理中の鍋に触れてやけどをした後、親が主人公に「熱いから鍋には触らない

でね」と注意したというナラティブについて、評定者Bは親のしつけの表象として評定していた。しかし、評定マニュアルでは、危険から保護する目的での親の言葉かけ（ex. 「はさみに気をつけて」）はポジティブ表象の例として示されており、一方のしつけの表象の例はより厳しい行為を伴うもの（ex. 激しくない程度に子どもを叩く、タイムアウトとして子どもを別室に隔離する）として記述されていたことから、子どもを危険から保護しようとする親の目的が明確であり、かつ、注意など軽度な規律である場合は、ポジティブ表象として評定することとした。

F 評定の結果：類似する項目間のスコアの一貫性

評定マニュアルの信頼性の確認として、1回目と2回目を合計したMSSBの各項目スコアについて、1回目と2回目のいずれにもどの調査対象児にも一回も出なかったと評定された項目は除外し、類似する項目をポジティブ項目およびネガティブ項目としてまとめ、それぞれクローンバック α 係数を算出して内的一貫性を検討した。①ポジティブ項目（16項目）：誇り、コンプライアンス、共感・援助（親/きょうだい/調査対象児/祖母）、アフィリエーション、アフェクション、レパレーション、分与、人物のポジティブ表象（母親/父親/祖母/子ども）、関係性の期待（母子/父子）。②ネガティブ項目（28項目）：身体攻撃、非コンプライアンス、葛藤のエスカレーション、非難（他者）、罪、個人的傷、非典型的な応答（ニュートラル/ネガティブ）、罰・しつけ（身体的/非身体的）、人物のネガティブ表象（母親/父親/子ども）、人物のしつけの表象（母親/父親/祖母）、人物のコントロール表象（母親）、人物の不調和表象（子ども）、臨床項目（侵入的トラウマ/境界の混乱/ファンタジー傾向性/子どもの親役割/子どもの過大な力/モノの破壊/解決する落胆・喪失/未解決の落胆・喪失）、コントロール行動、不安行動。

その結果、①ポジティブ項目（16項目）間の α 係数は0.82であり、十分な内的一貫性があると考えられたが、以下の項目を除外すると α 係数がさらに上がることが分かった。それらとは、誇り、きょうだいおよび調査対象児からの共感・援助、分与、子どものポジティブ表象であり、いずれも、子どもの登場人物あるいは調査対象児自身についてのナラティブに基づいて評定された項目であった。これらの項目を除外した11項目で α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.85$ となった。除外した子どもの登場人物あるいは調査対象児につい

でのポジティブな項目間での α 係数は0.26と低く、項目間相関係数も低かった。大人を含む表象におけるポジティブ項目間には一貫性が見られたが、子どもに限定したポジティブ項目間には一貫性が見られなかったと考えられる。②ネガティブ項目（28項目）間の α 係数は0.80であり、十分な内的一貫性があると考えられたが、罪、個人的傷、子どもの親役割、不安行動を除外するとさらに α 係数が上がることがわかった。これらの項目は言い換えれば、罪悪感、痛みへの共感、子どもから親への向社会的行動、不安な中でMSSBに取り組むための補償行動、であり、調査対象児の共感性や向社会的性から生じるストレスを反映した項目とも考えられる。これらの項目を除外した21項目で α 係数を算出したところ、 $\alpha = 0.86$ となった。

G 調査対象児全体の、1回目と2回目のMSSB各スコアの変化

調査対象児全体で1回目と2回目の各MSSBスコアで差がみられたかを調べるため、1回目と2回目、各項目についてそれぞれ7つのストーリーを合計したスコアについて、対応サンプルによるWilcoxon順位検定を行った。1回目と2回目で有意差が出たのは、アフィリエーションのテーマ ($p < .01$) と罪のテーマ ($p < .05$) のみであり、いずれも1回目より2回目でスコアが高くなった。物語の一貫性スコアは2回目でスコアの上昇がみられたが、有意な差ではなかった。紙幅の都合上、有意差が出たアフィリエーション (図1) と罪 (図2)、および、有意差が出なかったが先行研

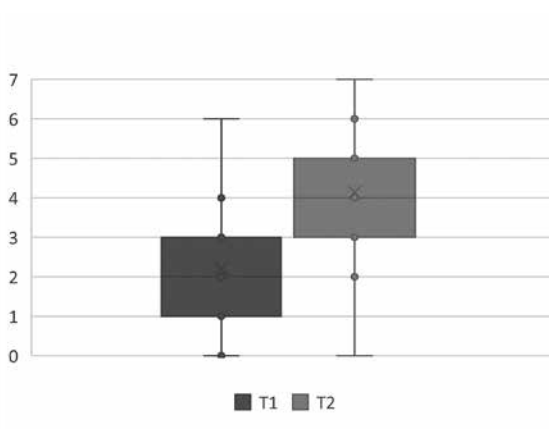


図1. MSSB 1回目と2回目のアフィリエーション (テーマ) スコア「あり」1点、「なし」0点で評定、7つのストーリーの合計、0～7点の分布 ($N = 15$)

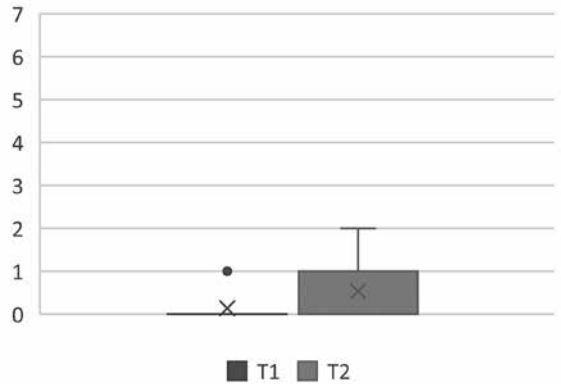


図2. MSSB 1回目と2回目の罪 (テーマ) スコア「あり」1点、「なし」0点で評定、7つのストーリーの合計、0～7点の分布 ($N = 15$)

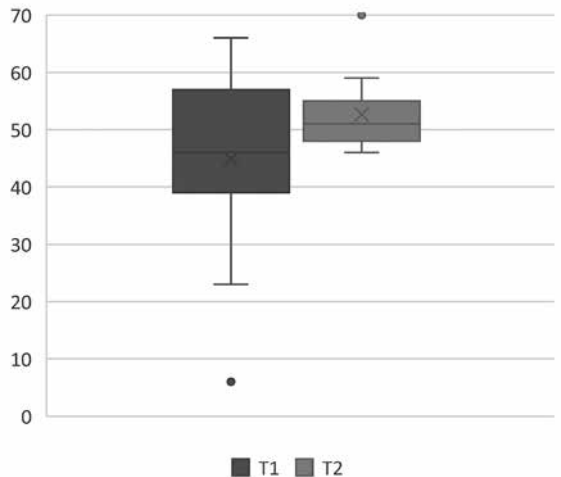


図3. MSSB 1回目と2回目の物語の一貫性スコア 0～10点で評定、7つのストーリーの合計、0～70点の分布 ($N = 15$)

究では差が出る傾向が指摘されている物語の一貫性 (図3) の結果のみ、Table 5、および図1、図2、図3に示した。アフィリエーションのテーマについて、図1の分布を見てみると、1回目と2回目でスコアのバラつきにはそれほど差が無く、調査対象児全体で2回目のスコアが上昇していることが分かる。一方、罪のテーマ、すなわち罪悪感への言及は、図2の分布を見てみると、1回目で罪悪感に言及する調査対象児はほとんどいなかったが、2回目で罪悪感に言及する調査対象児が増えたということが分かる。物語の一貫性

Table 5. MSSB 1 回目と 2 回目のスコア差 対応サンプルによるWilcoxon順位検定 (有意差があった項目と物語の一貫性のみ, $N=15$)

	検定統計量 (Z)	漸近有意確率
ストーリーの内容 (テーマ)		
アフィリエーション	2.81	.005
罪	15.00	.034
パフォーマンス		
物語の一貫性	93.00	.060

スコアについて、図 3 の分布を見てみると、平均スコアは微増し、調査対象児間のバラつきが小さくなったことが分かる。

H 各調査対象児の、1 回目と 2 回目の MSSB スコアの安定性

1 回目と 2 回目の MSSB において、各調査対象児のスコアの順位が安定的であったのかどうかを調べるため、各調査対象児の 1 回目 MSSB スコアと 2 回目 MSSB スコアの Spearman 順位相関をみた。紙幅の都合上、有意となったもののみを Table 6 に示す。有意な相関があったものはいずれも物語のテーマについての項目であり、身体攻撃、罪、非典型的応答 (ニュートラル)、非典型的応答 (ネガティブ) であった。これらはそれぞれ、半数以上の調査対象児が 1 回目、2 回目とも 7 つのストーリー全てにおいて“なし” (合計スコアが 0) とされたテーマであった。すなわち、過半数の調査対象児は 2 回目とも全く言及せず、一部の調

Table 6. MSSB 1 回目と 2 回目の同一項目間の Spearman 順位相関 ($N=15$, 1 回目 2 回目とも調査対象児全体の 3/4 以上がスコア 0 であった項目は除外、有意な相関があった項目のみ)

	相関係数
ストーリーの内容 (テーマ)	
身体攻撃	.62*
罪	.52*
非典型的応答 (ニュートラル)	.56*
非典型的応答 (ネガティブ)	.74**

*は $p < .05$ で有意, **は $p < .01$ で有意

Table 7. MSSB 各項目スコアの男女差 独立サンプルによる Mann-Whitney の U 検定 (有意差が出たもののみ, 女児 $N=10$, 男児 $N=5$)

	女児 > 男児	男児 > 女児
1 回目 MSSB	アフェクション, 母親のポジティブ表象, 母子関係性の期待	身体攻撃, 子どものネガティブ表象
2 回目 MSSB	母親のポジティブ表象	
1 回目と 2 回目の合計	アフェクション, 母親のポジティブ表象, 母子関係性の期待	子どものネガティブ表象

いずれも $p < .05$ で有意

査対象児のみが、1 回目も 2 回目も語ったテーマであったため、相関係数が高く出たと考えられる。

I 性差

性差がみられたかを調べるため、1 回目、2 回目、1 回目と 2 回目の合計、それぞれの各 MSSB スコアについて、独立サンプルによる Mann-Whitney の U 検定を行った。1 回目、2 回目、および 1 回目と 2 回目の合計でそれぞれ有意差が見られたものを Table 7 に示す。その結果、男児は 5 名しかいなかったため、この結果を信頼することはできないが、母親のポジティブな表象が、1 回目、2 回目、1 回目と 2 回目の合計のすべてにおいて、男児より女児で有意に高いという差が見られた。

J 観察された向社会的行動と MSSB 各スコアとの相関

欧米を中心とした先行研究では、MSSB と親・教師評定の SDQ (向社会的行動傾向、問題行動傾向) との関連を調べた研究は数多くある (前述)。本研究では、これらの先行研究の結果との一貫性を確認するとともに、親・教師評定の質問紙よりも客観的と考えられる観察による行動変数との関連をみることにより、日本における MSSB の有用性を検討する。そのため、保育園の自然場面で観察された調査対象児の他児への向社会的行動の数および成功率と、MSSB で得られた各評定スコア (7 つのストーリー × 2 回実施の合計スコア) との相関 (Spearman 順位相関) を調べた。紙幅の都合上、有意な相関がみられたもののみを Table 8 に示す。

ストーリーの内容で、向社会的行動数および成功率

Table 8. 向社会的行動数および成功率と、MSSBの Spearman順位相関係数（有意な相関があったもののみ、N=15）

	行動数	成功率
親（父/母）からの共感・援助	.54*	.40
アフェクション	.55*	.46
身体攻撃	-.70**	-.69**
母親のポジティブな表象	.77**	.63*
母親のしつつけの表象	-.52*	-.39
祖母のポジティブな表象	.55*	.49
子どものネガティブな表象	-.60*	-.56
非典型的応答（ニュートラル）	-.57*	-.67**
非典型的応答（ネガティブ）	-.77**	-.75**
母子関係性への期待	.68**	.53*
父子関係性への期待	.69**	.48

*は $p < .05$ で有意、**は $p < .01$ で有意

と有意な相関を示したのは以下のテーマのみである。まず、親からの共感・援助、アフェクション、ポジティブな母親表象、ポジティブな祖母表象は向社会的行動数と正の相関を示した。ポジティブな母親表象は成功率とも正の相関を示した。一方、しつつけな母親表象は向社会的行動と負の相関を示し、また、身体攻撃、ネガティブな子ども表象、ニュートラルな非典型的応答、ネガティブな非典型的応答は、向社会的行動数と成功率の両方と、負の相関を示した。関係性（母子関係および父子関係）の期待では、母子関係の期待と、父子関係の期待両方が、向社会的行動数と正の相関を示した。パフォーマンス（物語の一貫性など）との有意な相関はみられなかった。

4 考察

A MSSBの適切さおよび課題の確認（難易度、ストーリーシステム）

本研究は、国内の保育園でMSSBをマニュアルに従って実施し、実施や評定における課題を検討すること、また、MSSB各評定スコアと、自然場面観察によって得られた向社会的行動との関連を検討し、MSSBの有用性を検討することを目的としていた。

まず、実施についてであるが、ストーリーシステムから続きのストーリーを語るというMSSB自体の難易度について、5歳児クラス時点では、困難なく、ストーリーを作る課題に取り組みしていたと考えられる。また、4歳児クラス時点でも、ナラティブが十分でない場合は人形の動きによって評定することが可能であった。このことから、難易度という点で、日本の4～6

歳児においてもMSSBは実施可能である、と考えられる。

また、ストーリーシステムについては、抜粋した7つのストーリーシステムのうち、「両親の旅」ストーリーシステムについては、両親が子どもを家に残して夫婦だけで一泊旅行に行くという状況が今回の調査対象児たちの経験として馴染みが無いためか、ほとんどの児が不安や葛藤に言及しなかった。調査対象児の内的表象が十分に喚起されなかった可能性が考えられるため、このストーリーシステムについては、日本においてより一般的と思われる親子の分離のあり方に即した修正が望ましいと考えられる。

B 評定マニュアルの適切さ、課題の確認

評定マニュアルの適切さは、主に以下の3点から検討した。すなわち、評定者間一致度、類似する項目間のスコアの一貫性、そして先行研究の結果との一貫性である。

まず、評定者間一致度であるが、“あり”もしくは“なし”で評定する、ストーリーのテーマ、登場人物の表象、臨床群用項目の評定者間 κ 係数が、最初の評定で0.61未満であったことから、評定マニュアルの解釈には幅があり、明確さが十分とは言えない可能性が考えられる。協議によりマニュアルの記述の解釈を一致させることで第2回目評定では十分な一致率が得られたことから、事前に評定者間で、マニュアルの記述についての解釈をある程度明確にしておくことが望ましいと考えられる。

次に、類似する項目間のスコアの一貫性については、クロンバックの α 係数を算出し、ポジティブ項目、ネガティブ項目ともに、おおむね十分な内的一貫性が確認できたことから、評定マニュアルの項目が適切であったと考えられるとともに、ある程度項目をまとめて分析することも可能であると考えられる。ただし、ポジティブ項目については、大人（父/母/祖母）を含む表象におけるポジティブ項目から子どもに限定したポジティブ項目を除外した方が内的一貫性は高くなり、また、子どもに限定したポジティブ項目間には一貫性が見られなかったことには注意が必要である。子どもに限定したポジティブ項目は、大人がいる場面で子どもが課題を解決するなど、大人の応答性の無さの裏返しである可能性があり、単純にポジティブと考えることができないことを示唆していると考えられる。一方、ネガティブ項目では、罪悪感、痛みへの共感、子どもから親への向社会的行動、不安行動といった、

調査対象児の共感性や向社会性から生じるストレスを反映した項目との区別をする必要があることが考えられる。

調査対象児全体の、1回目と2回目のMSSB各項目スコアの差を検定した結果、物語のテーマとしてのアフィリエーション、および、罪（罪悪感）、が1回目より2回目でスコアが有意に高くなった。アフィリエーションは全体的にスコアが上昇し、罪（罪悪感）はほとんどみられなかったものが一部の調査対象児において言及されるようになった。このことは、年中児期（4-5歳）から年長児期（5-6歳）にかけて、調査対象児たちに、家族の一体感や所属の感覚（アフィリエーション）が増したこと、および罪への意識すなわち罪悪感の芽生えがみられるようになったことを示唆していると考えられる。一方、物語の一貫性は2回目で全体的なスコアの上昇がみられたものの、有意な差とはならなかった。サンプル数を増やした確認が必要である。

1回目と2回目での、MSSB各項目スコアの個人差は、一部の、物語のテーマについての項目（身体攻撃、罪、非典型的応答）のみ、安定的であった。これらの項目は過半数の調査対象児は2回とも全く言及せず、一部の調査対象児のみが、1回目も2回目も語ったテーマであった。すなわち、「多くの児がある程度言及する中で、どれだけ頻繁に言及するか」という頻度の個人差より、「言及するか、しないか」に個人差が出る項目こそが、比較的安定的だと考えられる。今回の調査対象児が非臨床群であることを鑑みると、臨床群も含む場合でのこの傾向は、さらに大きくなる可能性が考えられる。この結果は、海外の先行研究（ex. MatinKha, et al., 2020; Belden et al., 2007）⁴⁹⁾⁵⁰⁾で、MSSBがリスクを抱える児との関連において用いられていることと矛盾しないといえる。

男女差については、男児が5名のみのため、結果の解釈には慎重になる必要がある。しかし、アフェクションや母親のポジティブな表象といった、ポジティブなテーマや表象のスコアが女兒の方が高くなったことや、身体攻撃スコアが男児の方が高くなったことは、海外の先行研究（ex. Zahn-Waxler, et al., 2005; Oppenheim et al., 1997; von Klitzing et al., 2000; Woolgar, et al., 2001）⁵¹⁾⁵²⁾⁵³⁾⁵⁴⁾と矛盾しないといえる。

まとめると、今回の結果は、いくつかの留意点はあるものの、おおむね、海外の先行研究の結果と矛盾しないことを示しており、日本においてもMSSBが適切に実施および評定されることが期待できると考えら

れる。

C MSSBの有用性

MSSBが、海外の先行研究と同様に、行動や発達など他の変数と関連するのであれば、アセスメントとしての有用性が見込めるといえる。本研究では、保育園の自然場面観察によって調査対象児の向社会的行動数および成功率を調べ、MSSBの各評定スコアとの相関をみた。その結果、MSSBにおける、親からの共感・援助、アフェクション、母親・祖母のポジティブな表象、母子関係性および父子関係性への期待のスコアがそれぞれ、向社会的行動数と正の相関を示し、そのうちのいくつかは成功率とも正の相関を示した。また、身体攻撃、母親のしつけの表象、子どものネガティブな表象、非典型的応答は向社会的行動数と負の相関を示した。このことから、調査対象児の向社会的行動という外に表れる“行動”が、温かな“内的表象”に基づくものだと考えられるとともに、MSSBが、そうした外に表れる行動に結びつく内的表象を適切に取り出すことが可能である、ということが考えられる。従って、日本におけるMSSBの使用にも、ある程度の有用性が見込めると考えられる。

D 本研究の限界

一方で、今回の調査には以下のような課題がある。まず、今回の調査では、MSSBの13のストーリーシステムのうち、7つを抜粋して実施しており、残る6つのストーリーシステムについては実施できていない。MSSBは調査の目的に応じてストーリーシステムを抜粋して行うことを許容しており、園や調査対象児の負担を考えて今回の調査では7つに絞り込んだが、残る6つのストーリーシステムにおける日本の子どもの反応については分からないままである。また、サンプル数が少ないため、今回の結果を一般化することはできない。特に、今回の調査では、非臨床群のみを対象としたため、臨床群用の評定項目については個人差がほとんど出ず、それらが子どものどのような心や行動の問題と関連するのかわき見だせなかった。今後の課題として、臨床群も含めた、より大きいサンプルにおける知見の蓄積が必要であることが挙げられる。

謝辞：本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費（13J09674）および東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターの関連SEED研究助成を受けて行われた。協力してくださった園の皆様、園児

の方々に心より感謝申し上げる。

注

- 1) Bowlby, J. 1969 (1982). *Attachment and loss: vol.1. Attachment*. Basic Books.
- 2) Bowlby, J. 1973. *Attachment and loss: vol.2. Separation*. Basic Books.
- 3) 坂上裕子. 2011. 「アタッチメントの発達を支える内的作業モデル」数井みゆき・遠藤利彦（編）『アタッチメント 生涯にわたる絆』ミネルヴァ書房.
- 4) 遠藤利彦. 2016. 「現代における親子・家族関係と乳幼児からの保育」秋田喜代美（編）『変容する子どもの関係』岩波書店.
- 5) Hamilton, C. E. 2000. "Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence". *Child Development*, **71**(3), 690-694.
- 6) Main, M. 1996. "Introduction to the special section on attachment and psychopathology: 2. Overview of the field of attachment". *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **64**(2), 237-243.
- 7) Sroufe, L. A., Carlson, E. A., Levy, A. K., & Egeland, B. 1999. "Implications of attachment theory for developmental psychopathology". *Development and Psychopathology*, **11**(1), 1-13.
- 8) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, W., & Wall, S. 1978. *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Erlbaum.
- 9) Waters, E., & Deane, K. E. 1985. Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. *Monographs of the Society for Research in Child Development*. 50(1-2), 41-65.
- 10) Main, 前掲 (1996).
- 11) Bretherton, I., Prentiss, C., & Ridgeway, D. 1990. "Family relationships as represented in a story completion task at thirty-seven and fifty-four months of age". *New Directions for Child Development*, **48**, 85-105.
- 12) Oppenheim, D. 1997. "The attachment doll-play interview for preschoolers". *International Journal of Behavioral Development*, **20**(4), 681-697.
- 13) Green, J., Stanley, C., Smith, V., & Goldwyn, R. 2000. "A new method of evaluating attachment representations in young school-age children: The Manchester child attachment story task". *Attachment and Human Development*, **2**(1), 48-70.
- 14) 西田季里 2018. 「幼児の内的世界にアクセスする：マッカーサー・ストーリーシステム・バッテリー（MSSB）」『発達』153, pp.30-35. ミネルヴァ書房.
- 15) Buchsbaum, H.K., & Emde, R.N. 1990. Play narratives in thirty-six-month-old children: Early moral development and family relationships. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **45**, 129-155.
- 16) Holmberg, J., Robinson, J., Corbitt-Price, J., & Wiener, P. 2007. Using narratives to assess competencies and risks in young children: Experiences with high risk and normal populations. *Infant Mental Health Journal*, **28**(6), 647-666.
- 17) Emde, R. N., Wolf, D. P., & Oppenheim, D. (Eds.) 2003. *Revealing the inner worlds of young children: The MacArthur Story Stem Battery and parent-child narratives*. Oxford University Press.
- 18) Bretherton, I., & Oppenheim, D. 2003. "The MacArthur story stem battery: Development, administration, reliability, validity, and reflections about meaning". In R. N. Emde, D. P. Wolf, & D. Oppenheim (Eds.), *Revealing the inner worlds of young children*. pp. 55-80, Oxford University Press.
- 19) Stadelmann, S., Perren, S., von Wyl, A., & von Klitzing, K. 2007. Associations between family relationships and symptoms/strengths at kindergarten age: What is the role of children's parental representations? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **48**, 996-1004.
- 20) Goodman, R. 1997. The Strengths and Difficulties Questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **38**, 581-586.
- 21) von Klitzing, K., Stadelmann, S., & Perren, S. 2007. Story stem narratives of clinical and normal kindergarten children: Are content and performance associated with children's social competence? *Attachment & Human Development*, **9**, 271-286.
- 22) MatinKha, F., Amiri, S., Mazaheri, M. A., & Ghanbari, S. 2020. The mental representation of attachment and narrative coherence in children with and without externalizing disorders, *Early Child Development and Care*, **190**:16, 2543-2550.
- 23) Stadelmann, S., Otto, Y., Andreas, A., von Klitzing, K., & Klein, A. M. 2015. Maternal stress and internalizing symptoms in preschoolers: the moderating role of narrative coherence. *Journal of Family Psychology*, **29**, 141-150.
- 24) Müller, E., Perren, S., & Wustmann Seiler, C. 2014. Coherence and content of conflict-based narratives: Associations to family risk and maladjustment. *Journal of Family Psychology*, **28**, 707-717.
- 25) Stadelmann et al. 前掲 (2015).
- 26) Dealy, J., Mudrick, H., & Robinson, J. 2019. Children's narrative story stem responses: Contributions of executive functioning and language proficiency to relationship representations. *Social Development*. **28**: 168-185.
- 27) Belden, A. C., Sullivan, J. P., & Luby, J. L. 2007. Depressed and healthy preschoolers' internal representations of their mothers' caregiving: Associations with observed caregiving behaviors one year later. *Attachment & Human Development*, **9**, 239-254.
- 28) Macfie, J., Toth, S. L., Rogosch, F. A., Robinson, J., Emde, R. N., & Cicchetti, D. 1999. Effect of maltreatment on preschoolers' narrative representations of responses to relieve distress and of role reversal. *Developmental Psychology*, **35**, 460-465.
- 29) Langevin, R., Cossette, L., & Hébert, M. 2020. Emotion Dysregulation in Sexually Abused Preschoolers: Insights from a Story Completion Task, *Journal of Child Sexual Abuse*, **29**:4, 468-489.
- 30) Warren, S. L., Oppenheim, D., & Emde, R. N. 1996. "Can emotions and themes in children's play predict behavior problems?" *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **34**, 1331-1337.
- 31) Oppenheim, D., Nir, A., Warren, S., & Emde, R. N. 1997. Emotion regulation in mother-child narrative co-construction: Associations with children's narratives and adaptation. *Developmental Psychology*, **33**, 284-294.

- 32) von Klitzing, K., Kelsay, K., Emde, R. N., Robinson, J., & Schmitz, S. 2000. Gender-specific characteristics of 5-year-olds' play narratives and associations with behavior ratings. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 39, 1017-1023.
- 33) Zahn-Waxler, C., Park, J. H., Essex, M., Slattery, M., & Cole, P. M. 2005. Relational and overt aggression in disruptive adolescents: Prediction from early social representations and links with concurrent problems. *Early Education and Development*, 16, 259-282.
- 34) Oppenheim et al., 前掲 (1997).
- 35) von Klitzing et al., 前掲 (2000).
- 36) Woolgar, M., Steele, H., Steele, M., Yabsley, S., & Fonagy, P. 2001. Children's play narrative responses to hypothetical dilemmas and their awareness of moral emotions. *British Journal of Developmental Psychology*, 19, 115-128.
- 37) Andreas, A., Otto, Y., Stadelmann, S., Schlesier-Michel, A., von Klitzing, K., and Klein, A. M. 2017. Gender Specificity of Children's Narrative Representations in Predicting Depressive Symptoms at Early School Age. *Journal of Child & Family Study*, 26:148-160.
- 38) Grey, I. K. & Yates, T. M. 2014. "Preschoolers' narrative representations and childhood adaptation in an ethn racially diverse sample". *Attachment & Human Development*, 16(6), 613-632.
- 39) Eshel, Y., Landau, R., Shlayer, Y., & Ben-Aaron, M. 1997. "Negotiation over bids for compliance of three-year-old kibbutz children: A narrative approach". *Early Education and Development*, 8, 119-135.
- 40) Lee, K. S., Jung, S. J., & Shin, Y. J. 2003. "Narrative representations of caregivers and self and representation structure in maltreated preschoolers". *Korean Journal of Developmental Psychology*, 16, 71-86.
- 41) Lee, M. & Lee, Y. 2013. The Preschoolers' Narrative Representations and Hostile Attributional Bias. *Journal of the Korean Home Economics Association*, Vol. 51 No. 1, 75-87.
- 42) 澤田瑞也・渋谷美智・中植満美子. 2014. 「幼児の内的世界を探る(1) マッカーサーのストーリーシステム・バッテリーを用いて」『神戸海星女子学院大学研究紀要』, 53, 25-33.
- 43) 澤田瑞也・渋谷美智・中植満美子. 2015. 「幼児の内的世界を探る(2) マッカーサーのストーリーシステム・バッテリーを用いて」『神戸海星女子学院大学研究紀要』, 54, 27-36.
- 44) Robinson, J., Mantz-Simmons, L., Macfie, J. 2009. *The Narrative Coding Manual, Tennessee version*. Unpublished manuscript.
- 45) 西田季里 2021. 「子どもの思いやりを見とる試み—園児の向社会的行動についての観察研究と保育実践への示唆」東京大学発達保育実践政策学センター (監修), 秋田喜代美・遠藤利彦 (編) 『発達保育実践政策学研究のフロントランナー第1巻』, pp.1-25, 中央法規出版.
- 46) 西田季里 2021. 「共同行為としての向社会的行動の発達: 向社会的な幼児は向社会的な受け手でもあるか? 期待外れの向社会的行動に対する幼児の受容とその動機についての検討」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 60, 1-11.
- 47) 若林紀乃 2003. 「思いやりを上手く表現できない幼児—思いやりの表現方法の分析から」『幼児教育研究年報』25, 55-61.
- 48) Robinson et al., 前掲 (2009).
- 49) MatinKhah, et al., 前掲 (2020).
- 50) Belden, et al., 前掲 (2007).
- 51) Zahn-Waxler, et al., 前掲 (2005).
- 52) Oppenheim et al., 前掲 (1997).
- 53) von Klitzing et al., 前掲 (2000).
- 54) Woolgar, et al., 前掲 (2001).